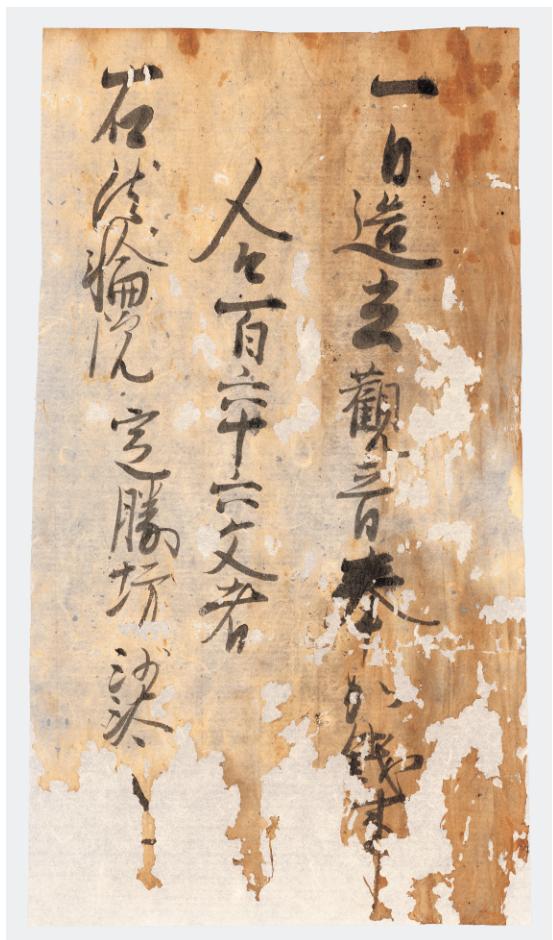


修理完成記念 特別公開

奈良・法華寺 十一面觀音立像

法華寺は平城宮跡の東に位置する光明皇后発願の寺院で、皇后の姿を写したと伝わる十一面觀音立像（国宝）を本尊としてまつります。このたび特別公開する十一面觀音像は、同じ本堂内でも東南隅に安置される等身の像で、奈良時代以来の靈験像として知られる奈良・長谷寺本尊の姿を模しています。昨年度実施した保存修理に際して像内から納入品が発見され、疫病を退けたり雨が降ることを願い一日で仏像を造り上げる「一日造立仏」と判明しました。こうした成果を受けて、面目を一新した像とともに納入品を仏像館で特別公開いたします。



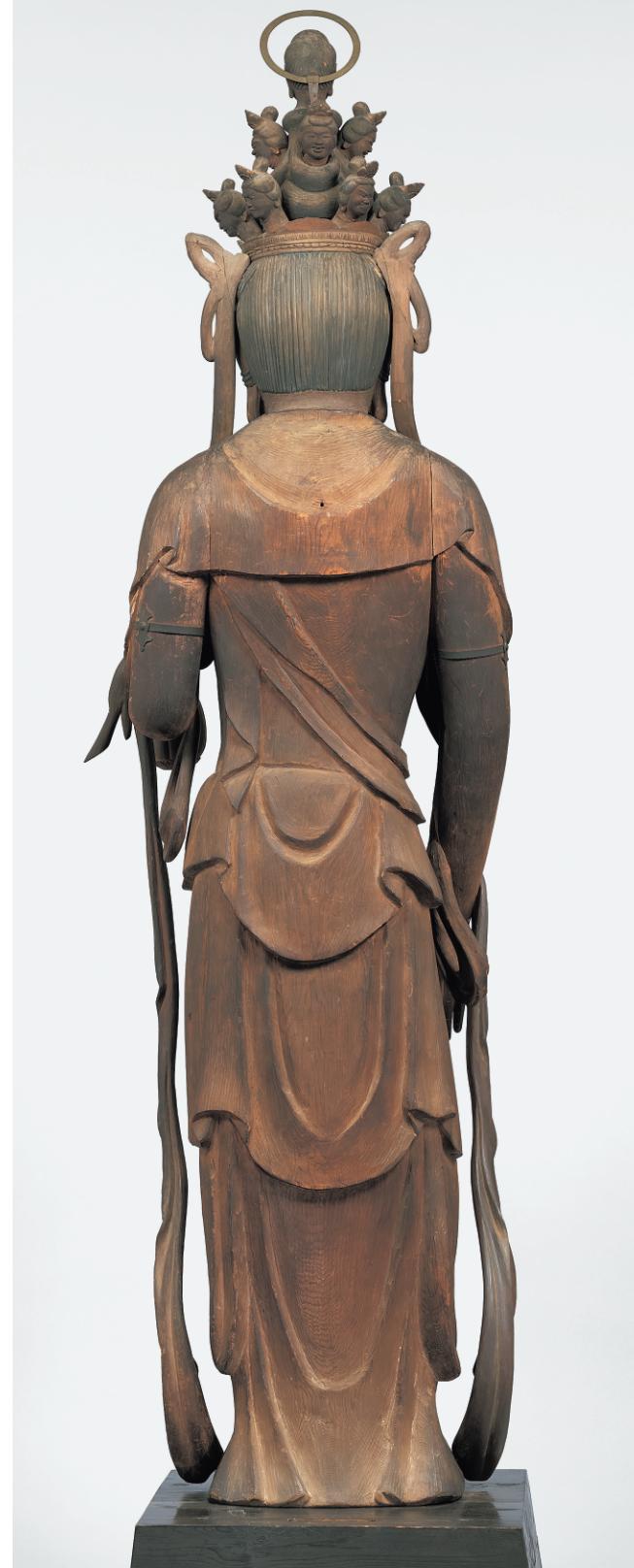
奈良国立博物館
NARA NATIONAL MUSEUM



正面（光背・台座とも）



正面



背面



右側面



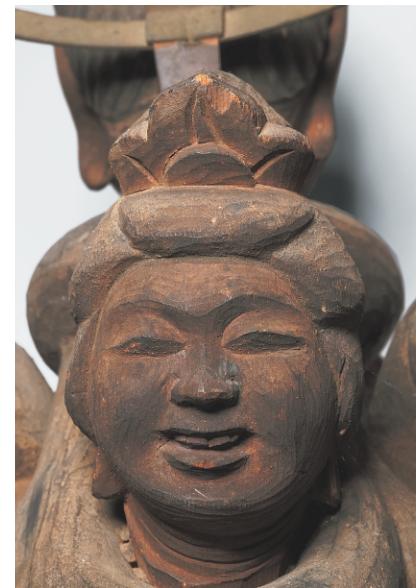
左側面



造立当初の頭上面 菩薩面



同 狗牙上出面



同 大笑面

十一面觀音立像 木造 素地 像高 178.2cm

体部：鎌倉時代（13～14世紀） 頭部：江戸時代 延宝4年（1676） 奈良・法華寺

本像の光背と台座にしるされた延宝5年（1677）の銘文によれば、江戸時代には法華寺の至近に鎮座する宇奈多理坐高御魂神社（桜梅天神とも称する）の本地堂にまつられていたが、明治初年の神仏分離を経て同寺境内に迎えられた。従来、制作時期について室町時代とする見解がある一方、体部は鎌倉時代にさかのぼり、頭部のみ後世の補作とする見方もある。また、簡略な彫り口や像の表面に彩色しない点から、一日造立仏の可能性があった。

昨年度に実施された保存修理は、緩んだ矧目の接合や材質の強化を主目的としたが、解体に際して像内納入品が発見された。頭部からは『妙法蓮華経』や水晶製舍利容器などが見出され、延宝4年に法華寺法主の高慶尼（後水尾天皇の皇女）の発願で頭部の新造と納入品の奉籠がおこなわれたことが判明した。

一方、体部には光明真言を押印した紙を巻いたものを14巻も納めていたが（一部に延宝4年銘を確認）、これとは紙の劣化や変色の度合いが明らかに異なる一括りに丸めた紙束があり、展開するとより古い時代にさかのぼる結縁交名が複数現れた。うち1枚には「一日造立觀音」の記があり、本像を一日造立仏とする先の推測が裏づけられた。等身像の一日造立は、鎌倉時代後期から室町時代にかけて興福寺の内外でおこなわれた仏教儀礼であり、現存作例としては文永5年（1268）の京都・乙訓寺十一面觀音像、弘安元年（1278）の奈良・西方寺藥師如来像、徳治3年（1308）の京都・川合京都佛教美術財団（燈明寺伝来）不空羈索觀音像、建武元年（1334）ごろの康成作と推定される奈良・觀音寺（柳觀音堂）十一面觀音像が知られる。本像はこれらにつづく5例目の確認となった。

左右の手に水瓶と錫杖を執り、台形の磐石上に立つ姿は、奈良時代以来の靈験像として知られる奈良・長谷寺の本尊を模しているとともに、春日四宮の本地仏としての性格も与えられている。着衣形式に注目すると、裙の折返しの形や腰布の衣端を両膝間に交差させる形は、一日造立仏の可能性がある興福寺菩提院大御堂および奈良・腰越会所安置の不空羈索觀音像とほぼ一致し、先述の觀音寺像とも共通する。これら鎌倉時代後期から南北朝時代にかけて制作された一日造立仏、あるいはそうと推測される作例との比較から、本像の体部は13世紀末ないし14世紀前半の制作と考えられる。着衣形式の類似は、等身像を一日で手早く仕上げるための定型が存在したことを示唆しているのだろう。本像の制作事情はつまびらかでなく、体部のみから作者を推定することも困難だが、細身のプロポーションや柔らかさをとどめた肢体および衣文は、燈明寺伝来像や觀音寺像とは趣を異にするため、いまのところ別の作者を想定しておきたい。

なお、頭上面の大半は延宝修理時の補作だが、失われた当初の頭部に附属していたとみられるものが少なくとも3面ある（上図）。高慶尼による頭部の新造にあたり、当初像の由緒や靈験が引き継がれることを祈念して再利用したのだろう。さらに高慶尼は翌年に光背と台座を補作して、本像の再興が遂げられた。

本像の保存修理は公益財団法人三菱財団による助成を受け、施工は公益財団法人美術院が担当した。納入品の修理は株式会社文化財保存がおこなった。

解説 山口 隆介（奈良国立博物館学芸部文化財課美術工芸室長）

写真 西川 夏永（同資料室員） ※頭上面の写真をのぞく

修理完成記念 特別公開 奈良・法華寺 十一面觀音立像

仏像館 名品展「珠玉の仏たち」 令和7年（2025）9月30日（火）～12月21日（日）

編集・発行 奈良国立博物館